

## 『科学を捨て、神秘へと向かう理性』

ジョン・ホーガン(John Horgan)著、竹内 薫 訳

徳間書店、2004 年、367 頁、本体価格 2200 円、(ISBN: 4198619506)

原題は『rational mysticism』(2002 年、翻訳は一部をカットしている)。

著者はフリーのサイエンスライター。著書に『科学の終焉』、『続・科学の終焉(未知なる心)』(いずれも徳間書店)がある。

訳者は科学作家、小説家(ペンネーム“湯川薫”)。「第36回日本超心理学学会大会」特別講演『メタフィクションとしての<意識>と<宇宙>』(2003 年)の講師を務められた。その中で本書の紹介をされている。

本書は、神秘体験の謎——“神秘体験とは何か？”“神秘体験は科学(=理性)と調和しうるのか？”——に迫る試みである。その謎を解くべく、著者は、神秘主義研究の大家とされる学者たちへのインタビューに乗り出す。そして著者は、「科学と神秘主義は和解した！」と結論する。本書の原題は、この、両者の和解を示している。

しかし、訳者の竹内薫氏は前記の講演の中で、「彼の結論は私には納得しがたい」と指摘されている。

さて、もともとサイの实在に懐疑的だった著者は、本書の取材を通して否定的な見方を決定的にし、幻覚・錯覚説をとるようになる。その足跡をたどりながら、本書のサイに関するくだりを簡単に紹介しよう。

まず登場するのは、頭に電極をつけ、脳に電磁刺激を加えることにより、神秘体験を引き起こす機械——“神の機械(God Machine)”を発明した心理学者、パーシングー。

実験台になった著者は、残念ながら神の世界は見なかった。問題はこのあとである。

実はこの実験は、ESP(テレパシー)の実験も兼ねていたのである。ESP 能力を高めるため、“神の機械”の電磁刺激と、感覚遮断(ゴーグル、防音)とを組み合わせていたのだ。いわばガンツフェルト法の応用である。

実験結果はみごとの中。しかし著者は、実験の不備を指摘し、サイ仮説を否定する。さらなる問題は、実は、著者は、ESP 実験に参加させられていることを事前に知らされていなかったのである。

次に登場するのは、元超心理学者スーザン・ブラックモア。本書には、否定派に転身した詳しいいきさつなど、専門書には見られないエピソードも数多い。例えば、超心理学者サージェントの実験室を訪ねた時のこと。データ改ざんの危険性に気付いたブラックモアが、そのことを指摘したところ、研究所から“締め出されて”しまったという。

ブラックモアは“ヒツジ”(サイの实在を信じる人)の特徴をこう指摘する。

- 統計に甘く、サイを肯定する方向に統計を誤って判断しがち。
- ランダムなロールシャッハ型の画像にパターンを感知する。

以上が本書のサイに関するくだりの概略であり、ひいては著者がサイの存在を否定するに至った主要な理由でもある。

本書の目次は次のとおり。登場するおもな学者たちのプロフィールを併記する。

各章の見出しは、各学者の、神秘主義へのアプローチの手法ともなっており、内容を概観するのに便利である。

	目次	学者	専攻
第1章	永遠の哲学	ヒューストン・スミス	宗教哲学
第2章	ポストモダン主義	バーナード・マッキン	神学者
第3章	//	スティーブン・カツ	宗教哲学
第4章	トランスパーソナル心理学	ケン・ウイルバー	トランスパーソナル心理学
第5章	神経科学はわたしたちを救えるか	アンドリュー・ニューバーク	医学(脳神経学)
第6章	神の機械	マイケル・パーシンガー	心理学
第7章	ヤギになったヒツジ	スーザン・ブラックモア	元超心理学者、ライター
第8章	禅と脳	ジェームズ・オースティン	神経科学(脳障害)
第9章	LSD 誕生の地で	アルバート・ホフマン	化学者
	//	フランツ・フォーレンブアイダー	精神科医
	//	クリスチャン・ラッテ	人類学者
第10章	神の精神分析医	スタニスラフ・グロフ	精神分析医
	//	リック・ストラスマン	精神分析医
第11章	紫色の絢爛たるスーツの男	テレンス・マッケンナ	作家
第12章	アヤワスカ	アレクサンダー・シェルギン	薬理学者

(中村 薫子)